

自称特別捜査隊改め期間限定八十神高校特別捜査隊

じじょうとくへんさうさいたいあらためきかんげんていやそがみこころうとくへんさうさいたい

自称特別捜査隊

ペルソナ能力を手に入れた少年少女たちが、連続誘拐（殺人）事件の解決を望み、自主的に結成した捜査隊。“マヨナカテレビ”に映った人物が誘拐されることを突き止め、“テレビの中の世界”から救出していく傍ら、犯人を追い求めている。

人物紹介

主人公 = 瀬多総司：『自称特別捜査隊』リーダー。今年の春に両親の都合で叔父のもとへ預けられ、八十稲羽市へ転校して来たばかり。社交性が高く、頼られやすい性格。学内に限らずまちの住人たちから頼み事をされることも多いが、本人はそういった交流も田舎ならではのものだと楽しんでいる。

花村陽介：総司の親友にして“相棒”。春先に起きた殺人事件により憧れであった先輩を亡くし事件解決に心血を注いでいた。大型スーパー“ジュネス”店長の息子。

里中千枝：総司のクラスメイト。明るく元気な少女。カンフーが大好き。

天城雪子：総司のクラスメイト。おっとりとしているが、芯は強い大和撫子。

クマ：“テレビの中の世界”の住人だったが、ペルソナ能力取得をきっかけに人間としての姿を手に入れ現実世界へと“出てきた”。現在は陽介の家に居候中。

巽完二：雪子の次に誘拐された後輩。恐ろしい外見だが、根は優しく素直。

久慈川りせ：完二の次に誘拐された後輩。元アイドル。総司に好意を寄せている。

キツネ：寂れた神社に住み着いている狐。神社復興を目指して総司に手助けを頼る傍ら、不思議な薬草を駆使し自称特別捜査隊を支援している。

白鐘直斗：事件解決のため警察に協力している少年探偵。自称特別捜査隊の面々に共通点と事件への関与を見出し、たびたび接触を図る。

稲羽市連続怪死事件

被害者が高所に逆さ吊りになって発見された連続殺人事件。総司たちの担任教師を含む三名が殺害されたが、自称特別捜査隊の暗躍により犯人である久保美津雄を逮捕。連続殺人事件は幕を下ろし、総司たちに安息の夏休みが訪れる。

本編はゲーム中の八月七日から十三日をオリジナルストーリーで埋める二次創作であり、捏造されたシナリオ・コミュニティ展開となりますのでご注意ください。
また、ゲームの内容へ触れるネタバレが含まれております。

序章 八月七日（晴）

【夏休みの勉強会】

「なあなあ、明日さあ、テレビン中に行かぬー？」

真夏の気温に溢れ出た汗に濡れて重くなつた小麦色の髪を邪魔そうに掻き上げながら、花村陽介は胸元に抱え込んでいたノートとシャープペンシルを放り出し、脇に寄せていた缶ジュースをぐびりと呷った。

じりじりと照り付ける日差しを避けてフードコートの大テーブルにそれぞれ着席して夏休みの宿題に励んでいた学友たちは、彼の発言に半眼で応えた。

「花村あーまじめに勉強してよねー。ウチらのやる気もそがれるじゃん！」

隣に座っていた里中千枝がむき出しの肘でその背中を張り倒す。

「いでっ」

「ちよつと、アンタすごい汗。やだっ」

じつとりと濡れた感触を嫌がって体を捻り、千枝は逆隣に座ってやり取りを見守っていた天城雪子にウェットティッシュを分けてもらい、肘についた汗と掌を満足するまで拭い陽介を睨み付けた。

「なんだよ、しょうがないだろ。こんな暑かつたら汗ダラダラだっつーの。なあ完二？」

「異完二は振られた話に眉を寄せる。」

「まあ、男はしよーがないんじゃないっすか」色素の薄い髪を後ろに流し、肩のタトゥーペイントが人目を引く少年は、見かけに反して意外と上下の意識が強く、先輩である陽介に話しかけられれば無視することは出来ない。

うんうんと頷く陽介と完二にもティッシュを渡すと、雪子はそのままテーブルの真中に置き、「必要だったら使って」とにっこり笑いかけた。

「うー、でも本当に暑いね、今日。雪子先輩、いただきまーす」

ふるりと、ポリコームのあるストロベリーブラウンのツインテールを揺らして、久慈川りせがベタつく腕を拭う。整えた爪の先まで綺麗にすれば、体感温度が下がり、ようやくほっと息をついた。

「リセちゃん、クマモ〜……」

「えー？ もう、自分でやりなよ」

そう言いながら、りせはぐったりとして動かない金髪の少年に新しいものを差し出した。

そして、それが受け取られぬと察し、これみよがしなため息を吐いて汗の浮いた額を少々乱暴に拭ってやった。

「うっ、生き返るうー」

きよろりと青いビー玉のような瞳をめぐらせ、へにやりと笑う。

「リセちゃん、ありがと！ 優しいクマ〜」

“こちらの世界”に出てきて間もないクマと呼ばれる不思議な少年は、外見は十三、十四歳ほどに見えても彼の中身はぎょっとするほど幼い。ごろごろと擦り寄るクマに、りせが迷惑

そうな声を上げる。

「クマ、暑い！」

張り倒される前にと陽介は身を乗り出して弟分を制した。

「コラすけベクマ！ 女の子にあんま、くっ付

くんじゃねーって」

「ヨースケ嫉妬してるクマ？」

むふふ、とクマはこれ見よがしにりせの細い身体を抱きしめる。役得役得。とは言え、彼の小柄で細身なので、抱きついていると言ったほうがしっくりくる。

「ちっげーよ、そういうモンなの！ 人間は慎みってモンを持たないとなんねーんだよ。そういうルールなの！」

「ニンゲン、ルール……。うーん、わかった」

クマは渋々ではあったが、こっくりと頷く。軽い動作で腰を下ろし、りせにぺこりと頭を下げた。

「ごめんクマ〜」

「ん、よし」

「花村も、もうすっかり保護者だねー」

「そうだね、どちらかというとお兄さんかな」

「こんなん飼い主だつての」

くすくす笑いあう干枝と雪子に、肩を竦めた陽介は文字通りクマを養っている。もとは“テレビの世界の住人”だったクマを自宅に居候させているのだ。以来、彼にお菓子などを買い与えるのもっぱら陽介の役目になってしまった。

ただし、こちらでの常識を持たないクマへの扱いは、照れくさいのか性分なのか少々荒っぽい。

「ヨースケは“オニシュウト”みたいなんだ……」

「はあ？ てめ、クマつ、ないことないこと言つてんじゃないよ！」

うるりと大きな瞳を潤ませ、ここぞとばかりに女性陣に健気さをアピールするクマに、陽介は訂正しろと詰め寄った。

ここに居る者たちはクマの性格をある程度

把握しているので、一方的にクマが虐げられているわけではないことを理解しているのだが、陽介は逐一それに反応するので結局クマとのじゃれあいになってしまふ。

それも彼らなりのスキンシップなのかもしれないが、兄弟喧嘩のようにテールを挟んでぎゃあぎゃあと言ひ合いをされては、すでに宿題に手をつけるような雰囲気ではなくなっていた。

「なんだ、クマは陽介にいじめられてるのか」
雑然とした学友たちのテールに、席を外していた瀬多総司が戻ってきた。

「おー、用事は終わったのか」

「うん。本日の届け物は全て配達完了」

「ご苦労さん。受け取り印忘れるなよ」

総司は軽く笑つたようだった。そうすると、鋭い眼光が和らいで優しい面差しになる。

灰掛かった黒髪から、玉になった汗の雫が二、三滴ほろりと顎を伝い落ちた。乱暴に腕で拭き去る。

それでも整った面では、不思議と清潔感が漂って真夏の炎天下だと言うのに彼の周りだけ涼しげに見える。

「センセイ！ おかえりクマ！」

ぱあつと顔を輝かせるクマは、リーダーという役に着いているこの少年に懐いている。はしこい小動物のように総司の傍へ駆け寄ると、しよんぼりと大げさに肩を落とした。

「クマは、ヨースケに毎日いじめられてる可愛そうなクマちゃんね」

「おい、いじめてねーっつもの！」

ひゃあ、とワザとらしい悲鳴を上げて広い背中に隠れると、カリカリと怒る陽介に向かってべえと舌を突き出す。

小僧らしい動作だが、それも彼に対する甘えの現われなのか。

二人の間に挟まれた総司は苦笑いしてから、クマの頭に手を置いた。

「怒られるようなこと、本当にしてないのか？」

「う、えと」

「クマが悪いことをして陽介が怒ったのなら、それは苛めじゃないよ」

穏やかな口調で子供を諭すように真剣に青い瞳を見据えると、クマはうぬぬと唸り、ぎゅうつと眉を寄せ唇を尖らせた。

「クマも、悪かった……かもしれんクマ」

渋々謝るクマに、総司は苦笑いした。

かもじゃなくて悪かったんだよ、女の子に抱きつくわ、俺のベッドを菓子屑だらけにするわ、洗濯物は脱ぎっぱなしだわ、と陽介が日々の不平不満を漏らす前に、総司がぐしゃりとクマの髪を撫でた。

「じゃあ、きちんと謝らないとな」

ええ、と不満そうな顔をしたクマを笑顔で制し、頭一つ分小さな少年の背中を、陽介の目前にぐつと押しやった。

「……すまんクマ」

ぺこり、とお辞儀をする。よし、と総司は満足して空いている席に座った。

「……お前、俺と瀬多で随分態度違うじゃねーかよ……」

まあいいけどよ、と陽介は肩を竦めた。

ぐだぐだと勉強道具を放置し、テーブルで雑然とした雰囲気のままお喋りに興じる仲間たちを横目で見やり、財布から適当に紙幣を取り出すと完二にそれを差し出す。

「ちよつと休憩しようぜ。おごつてやるから、何かお菓子とか買って来いよ。みんなで食べそうなやつ。あ、俺パニラアイスね」

「……それ、世間一般ではパシリって言わねーか」

「グダグダ言わない！ ホレ、行け完二！」

ちえつと舌打ちしながらも、完二は素直に席を立つ。クマがそれに付き添い、女子たちは連れ立って化粧室へと向かった。

ノートや教科書、ペンケースがごつた返すテーブルには、陽介と総司だけが残っている。

「ったく、マジであいつの扱い方を教えて欲しいよ」

家でもあんな感じなんだぜ、と恨めし気にジュースをすすする。

「学童保育のバイト、一緒にやるか？」

「あー、お前は普段から子供の相手してるからか……」

「ああ、でもバイトする前に勉強した方が良さそうだな。宿題進んだ？」

うっ、と息を詰まらせる。テーブルの上には放置したノートが追いやられていた。進んだ形跡は見当たらない。

「……陽介、お前がみんなでやった方がやる気が出るって言っから……」

「いやー、だってこんなに暑くなるとは思わねーじゃん？」

「まあこうなることは予想してた」

「してたのかよ！」

「だから図書館じゃなくジュネスにしたんだろ……七人も居て、脱線しないわけがない」

おまけにクマは学校に在籍していないので、勉強や宿題の必要が無い。

構えと脱線を誘うのは目に見えていたし、その誘惑を断るのは難しいだろう。

「くつそおー、お前はいいよな。宿題なんてパツパツパーツと終らせらせそうだし」

「……」

「頭いいし顔もいいし強いし。本当、お前はカッコイイよ。さすが俺の相棒。リーダーカッコイイ！ 八十神高校のヒーロー！」

「……宿題は写させないぞ」

「なんだよー！ 瀬多の鬼畜番長！」

「教えてはやるよって言ってるのに。手助けはいらんかい？」

「……うん。や、それは、マジで頼むわ……」

がっくりと額をテーブルにくっつけて頂垂れた。教えてもらいながらも、結局は自分でやるしかないが、一人で唸っているよりは遙かにマシな結果になるだろう。

こめかみから垂れる水滴を乱暴に腕で拭う親友の顔を眺めながら、陽介はようやく本題を思い出した。

「そうだ、さつきみんなにも言ったんだけどさ。明日、テレビ行かぬ？」

「テレビ……？」

厚い前髪の向こうで眉が顰められる。

「……犯人は、もう捕まえただよ」

夏休みが始まってすぐ、担任の諸岡を含めた三人を殺し、雪子や完二、りせを“テレビの向こう側”へ落としていた犯人。自分たちと同年だったというその少年の乾いた瞳を思い出して、総司は喉元へと苦いものがこみ上げてくるのを感じた。

何も無い。誰も自分を見ない。

犯人だった少年はそう言っていた。

濁った空ろな瞳は、すべてを素通りして何も映してはいなかった。

深い絶望、世界に対する不信感、周囲への恐怖心。そういった闇が混ざり合い、彼を包んでいたのを感じた。

可哀想な、からっぽな少年。

同情、嫌悪、理解不能なものに対する恐怖。

それと同時に、「ゼロである」と言われた自分もあなっていたのだろうか、と思うと背筋が凍る。

それは決してありえないことではないように感じた。

「……何考えてる？」

訝しげに陽介が目の前に掌を翳す。汗ばんだ肌は太陽の光に照らされきらきらと眩しい。

「お前が悩み事って、イメージじゃないってか……。いや、そうじゃないな。誰が何考えてるかなんて、端から見てたらわからないもんな」

陽介は困ったように言葉を搜している。

「その、さ。なんか今まで定期的にテレビの中に入ってたし、事件解決 ってたっても即終わりにしちゃうの、なんか変な感じじゃんか。遊ぶのもいいけどさ、ちつと身体動かしてスカッとしようぜ、相棒！」

がしつと肩に腕を回して、身体ごとぶつかられて少しだけ体勢を崩しかける。

湿ったシャツ越しに感じる暑くるしい体温

を、普段ならば不快に思うのだろうが、今日だけはありがたかった。不器用な陽介の優しさを感じる。

「……うん。じゃあ明日も“特捜本部”集めてみんなに伝えておくよ」

犯人を捕まえようと結成した【自称特別捜査隊】の肩書きは、もう使わないものだと思っていたが、自分たちの絆にはその名前が一番しっくりくる気がした。

陽介は目を輝かせて腕を振り上げた。

「おっ！ やる気じゃん相棒。よし、明日は大暴れしてこようぜ！」

「そのためにも今日は出来るだけ宿題進めるぞ。みんなもそろそろ戻ってくるだろ」

「う……へいへい、がんばりますよっと」

陽介は苦笑いして放り出していたシャープペンシルを握り直した。

第一章 八月八日

【テレビの中へ】

「えー、さて、では今から自称特別捜査隊の特別探索会を始めますっ」

咳払いをして重々しく語りだした陽介に、完二は呆れたように眉を上げた。

「先輩……、何なんスか、それ」

「ま、今回は探索っていうよりは息抜きだな。やっぱ身体動かすとスカツとするじゃん？」

ウインクをして軽く受け流した陽介の言葉に、千枝が楽しそうに頷いた。

「まー長い夏休み、身体をなまらせないように鍛錬するのモイイかもね！」

ぐつと握りこぶしを作って意気込む。

いつもの探索時と同じく、学生服の腰にジャージを巻きつけた格好の千枝を筆頭に、特捜隊の面々は暗黙の了解で学生服に着替えて集まっていた。

「……夏休みだし、やっぱりちょっと目立つね、制服」

雪子が回りを見渡しながら少しだけ身体を縮こまらせる。

平均よりも長身な彼女は周囲からの視線を気にするが、視線が集まるのは彼女自身の優雅な立ち振る舞いであったり、清廉な顔立ちであったりすることが原因だとは思いつたらないらしい。

「早めに移動した方がいいかもな」

総司の隣で身体を丸めていたキツネがコンと鳴いた。このキツネも列記とした特捜隊のメンバーであり、神社復興のために働く姿はいじらしい。どこからか取り出した不思議な形の薬草をひらりと見せつけるキツネの頭をそつと撫でた。

「そうだね。クマも早く着替えたいし！」

そう言うクマが抱える鞆には、彼があちらの世界で着込んでいた熊のような生物の着ぐるみが詰め込まれている。

どう考えてもそんなものは脱いでいた方が動きやすいと思うのだが、もともと“からっぽだった”彼にとつてはその着ぐるみ自体を本体のように感じているらしい。

大事そうに抱えた鞆に頬をすり寄せ、クマは待ちきれぬと身体をゆすった。

「よし、じゃあ移動しようか。人数多いし、何人かに分けてあっちで合流しよう。陽介、千枝と雪子とキツネと、先に入ってくれ」

「ん、OK」

「じゃ、行こっか」

「瀬多くんたち、また後でね」

三人が席を立ち、リストウオツチで適当な時間を見計らっている総司の隣で、りせはぱたぱたと身体や手持ちの荷物を探っていた。

「おい、何やってんだ」

完二が見かねて声をかけると、りせは困ったように眉を下げて首をかしげた。

「……めがね、ない」

「はあ？」

「……たぶん、学校……」

「はああ？」

「どうしよ、置いてきちゃった。ほらこの前、補習についての話聞いたとき、学校に眼鏡もっていったから。完二も一緒に居たでしょ」

学校全体で行う期末試験の成績不振者への説明に、りせは眼鏡を持って行き、そのまま置いてきてしまったらしい。

あちらの世界でしか効力を発揮しない眼鏡は、こちらでは伊達眼鏡程度の役割しかない。今日の探索は急のことだし、りせを責める気はないが、総司は横で二人の会話を聞きつつ、補習については後で釘を刺そうと密かに決心する。

「りせちゃん、あの眼鏡気に入ってくれてるクマね」

「何で持っていくんだよ……」

「眼鏡、可愛いし頭良さそうに見えるから学校でたまにかけてるんだよね」

「その発想が頭悪イだろ！」

「完二、リセチャンを苛めちゃダメクマー！」
 「あー、わかった。とりあえずりせは学校行って眼鏡持っておいで」

ぎゃんぎゃんと言いつつ後輩たちとクマを止め、指示を出す。

「完二はりせと一緒にテレビに来てくれ」

「えーっ……」

「テレビに入るときは一人では入らない約束だろ。俺たちは先に入って探索してる。クマ、ナビ出来るだろ？」

あちらの世界でのナビゲーションは今でこそりせが行っているが、先日りせが仲間に入るまではクマがその役目を負っていた。

「ウン！ クマ、リセチャンの分まで頑張る！」

偉い偉い、と総司がその頭を撫でると、クマは嬉しそうにニコニコと笑った。幼い従姉妹と同居しているからか、総司はついついあどけない雰囲気のカマに対して子供にするように接してしまう。

「クマ、センセイの力になるクマよ」

本人もまんざらではなさそうなので、特に誰も気に留めないが。

りせは申し訳なさとかきもちを混ぜた表情でクマを見つめ、総司に軽く頭を下げた。

「先輩、すぐ戻ってくるね」

「じゃー早く行こうぜ」

なんだかんだと素直ではない完二も、遅れてテレビに入れば、りせが一人きりになってしまふことを考えれば仕方がないと立ち上がりざるを得ない。

ナビゲーションを専門とするりせのペルソナは戦闘が出来ないのだ。

家電売り場から入れる入り口広場にシャドウが出た事は今まで一度たりとも無いが、どちらにせよあちらの世界で一人きりになることは特捜隊で決めたルールの上ではご法度だ。

完二と一緒にいれば、よほど強敵じゃない限りは安全だろう。

「じゃあ、俺たちも行くか」

「クマ！」

無邪気に笑うクマに、総司も笑みが零れた。

家電売り場に設置してあるテレビから、入り口地点であるスタジオへ降りる。

ぐにやぐにやと歪む視界がぐんと開けて、総司とクマは慣れた動作で波紋状の模様が描かれた床に着地した。胸元に入れておいた眼鏡を取り出し装着する。霧に包まれた景色が一気にクリアになった。

「遅かったな……あれ？　なんだよ、りせと完二は？」

待機していた陽介が愛用のヘッドフォンを外し、きよろりと周りを伺った。

テレビに入る時は総司と陽介が最初と最後に入ることにしている。テレビに入る時は店員を、テレビの中では襲ってくるシャドウを警戒しなくてはならない。リーダーである総司と、戦闘期間が一番長い陽介が警戒役を担うのが

最適だろうという計らいである。

彼が入ってきたということは、探索メンバーが全員集まったということになるのだが。

「りせは忘れ物を取りに行った。後で完二と一緒に合流してもらう」

「あー？　ったく、しょうがねーな」

「まあ、すぐ来るだろ」

苦笑いする陽介に、着替え終わって丸いフォルムの着ぐるみになったクマが、おそらく胸であるうと推測できる箇所を逸らせて鼻息を荒くした。

「今日は、久々にクマナビ！」

「お前、ナビ引退じゃなかったのかよ」

「りせちゃんの代わりに頑張るクマ」

意気込むクマだが、赤と白をメインカラーにしたカラフルな熊の着ぐるみを纏っている姿は緊張感がない。

逆立った青い毛をびこびここと震わせ、それでもみんなの力になるうとしていているまっすぐで真剣な気持ちは伝わってきた。

「あつそ……ちゃんと、ナビやれよ。頼りにしてるかな」

陽介が笑ってふかふかの毛並みを撫でてやれば、クマは俄然やる気を出してその場で足踏みをする。幼児サンダルのようなピコピコと間抜けな足音が辺りに鳴り響いた。

「クマの勇姿、しつかり見とクマー！」

ふんふん！と頭頂部から湯気を立てつつ、シヤドウボクシングのように短い手を振り回すクマを見て、千枝と雪子も笑いながら傍に寄ってくる。

「おつ、クマくんやる気だね。頼んだぞよ」

「クマさん、よろしくね」

「ク、クマーン！ チエちゃんとかキちゃんのために、クマ、命かけるクマ」

女の子たちに頼られ、でれでれとそちらに向き直ったクマに、陽介と総司は苦笑いで応える他無かった。

「……ん、どうした？」

ふと総司がキツネを見ると、黄金色の毛玉は

いつになく緊張した面持ちでぐるると喉を鳴らしている。総司の視線に気づくと、落ち着かない様子でその場をうろついた。

「なんか、キツネさんの様子が変じゃない？」
気づいた雪子が腰を折って近寄ろうとする
と、キツネは不安そうに身体を抜いて織手を避けた。

人に触られることに慣れたキツネがこういった態度を取ることは珍しい。

機嫌が悪いときでも撫でるくらいはさせてくれるが、今日の様子は虫の居所の問題ではないようだった。

「……クマ、何か変わったところはないか」

小動物は周囲の以上をいち早く察知出来るという。もしかしたらキツネは何かこちらの世界での異常を感じ取っているのかもしれない。視線でメンバーに警戒を促し、総司も同様に武器である剣をいつでも構えられるよう握り締めた。

「ん……と、空気がざわつとしてるけど……」

クマが大きな両目の間にある、黒豆のような鼻をひくりと蠢かす。ぎゅうっと瞳を閉じて、真剣にあたりを探っている間に、キツネはある方向を見つめてぐるぐると唸った。

「？ キツネ、何か……」

「センセイ、あっち！」

キツネの様子を伺っていた総司に、クマが声を張り上げる。

「新しい場所が出来てるクマ！」

「！」

新しい場所。こちらの世界では人の思いに反応して新しい世界が作られていく。テレビに投げ込まれた被害者や雪子たちによって、既にいくつかの場所がダンジョンとしてこちらの世界に作られているが。

「は？ 新しい場所……って」

「誰か……いるってこと？」

「それって……、また事件が起きたって意味……？」

テレビには、既に中に入れる人間を介入しな

ければ入ることは出来ない。特捜隊の大半がこの中に入れる能力を獲得したのは、事件に巻き込まれたからだ。

こちらに新しい場所が出来たというならば、また誰かが落とされたのかもしれない。

「で、でも、犯人はもう捕まえたじゃん！ どういうこと？」

「知らねーよ！ でも……新しい場所が出来たってことは、誰かいるってことなのか？」

うるたえる干枝と陽介を尻目に、不安そうに総司へ視線を投げかけ雪子が問う。

「……瀬多くん、どうしようか？」

「うーん。クマ、誰かいる気配はあるか？」

「場所があるのは判るクマ……でも、人がいるかはわからない」

クマは申し訳なさそうに俯いた。

「まだ事件とは決まってるじゃないし、とりあえずそっちを探索しよう。中でのナビは任せたぞ、クマが頼りだ」

「クマ……！ 頑張るクマー！」

総司に頼られているという事実には、じんと瞳を潤ませ、クマはより一層気合を入れるように腕を振り上げる。

「ま、なんの情報もないしな……、クマきち、何か気づいたらすぐ教えてよ」

「わかつてるクマー」

「よし、じゃあ、しゅっぱーっ！」

勇んでステップを踏む千枝の号令に、一同は警戒するキツネを宥め、そちらへと向かうことにした。

「って……ここ、学校じゃねーかよ！」

驚く陽介の言うとおり、目前には自分たちの通う八十神高校が濃い霧に包まれて幽暗と佇んでいた。

とところどころ奇妙に変形した校舎は、通いなれた場所のはずなのにどこか落ち着かないような不安な気持ちにさせる。

やけに高い塀に囲まれたその場所は不気味

としか形容出来ない。

「でも、今までこんなところ無かったよね？」

「わかんないクマ……。でも、ここ、変なカンジ。空気がピリピリしてる」

「グルルル」

クマに同意するようにキツネは唸り続けて警戒を解かない。動物にしか分らない何かがあるのだろうか。

「シャドウが居るかもしれない。注意してくれ」

総司の言葉に頷き、各自武器を構えて周囲を警戒しながら進んだ。

門をくぐると、隔てていたものが無くなり校舎を直接見渡すことが出来る。

「なんだか、やっぱりちよつと形が違うね」

「そうだね。こつちの学校は、なんか不気味だし……」

「お？　なんだよ里中。ビビっちゃってるわけ？」

「はあ？　ん、んなワケないじゃん！」

顔を赤くして陽介の言葉に反論しているところを見ると、あながち外れではないようだ。薄明るくはあるが、どこか陰を感じさせる学校は人氣が全くないのも合わせて不自然な造形物になっている。

「……もし誰かが入れられてこの学校が出来たんだとしたら……。それって、やっぱりここに思い入れのある人、ってことかな」

雪子がぼつりと呟いた言葉に考えを巡らせる。

「……学校、テレビ、落とされた。……と、言われると、モロキンを思い出すな」

「え？ モロキン？」

総司の言葉に陽介が目を剥いた。

「って、ここを作ったのがモロキンの思い、ってことか……。いや、確かに、俺たちはモロキンを助けられなかったし……。そういう可能性もあるか」

苦々しげに吐き捨てる言葉に、総司は頷いた。出来たダンジョンは全てそのまま残っている。

諸岡が入れられた時にこの場所が作られたのかもかもしれない。

「って。それじゃあこの場所は故人の建造物ってことかよ……。……おい、へ、変なこと言わないよな！」

ぞわり、と背中を冷たい手で撫でられたような寒気を感じて陽介が上ずった声を出した。

いくら知人だったとは言えそこで殺人が行われたと考えると、この場所の強烈な違和感と合わせて妙に迫力のある重苦しさを感じる。

周囲の気温がぐつと下がった気がした。

「何よ、花村もビビってんじゃん！」

「ばっか！ ビビってねーよ」

慌てて勢い込む陽介だが、血色を欠いた顔で過剰なまでに反応しているのは、肯定しているのにも等しい。

どちらがより臆病かを言い争う二人は仲が良いのか悪いのか。悪くはないのだろうな、と総司はひっそり思う。

「とりあえず、先へ進もう」

喧嘩をしているわけではないが、このままでは探索も出来ない。総司が声を掛けると二人は逡巡した後、お互いに顔を見合わせて頷いた。

互いを高めあえる存在は美しい。

「さて、いっちょパパパーっと探索しますかあ！」

「そ、そうねえ。別に怖くなんてないしねっ」

先ほどまでの汚名を返上しようと、二人は足早に校内へと向かった。

「……意地っ張りも、使いようだね」

雪子に関心したように見上げてくるので、総司は耐え切れずに少し嘔出してしまった。

* * *

一方その頃、りせと完二は現実の世界にある八十神高校の一階廊下を連れ立って歩いている。

「ったく、あとは忘れ物ねーんだな？」

「ん、大丈夫！」

眼光鋭い強面で誤解されやすい性格のためにぶっきらぼうな印象が強い完二だが、面倒見はいい方だ。

短い期間の付き合いだが、そのくらいは理解している。りせは無邪気に礼を良い、手に持っていたピンク色のフレームを確かめるように弄んだ。

「……！」

「？ どうした」

ひくんと身体を跳ね、きよろりと周りを見渡すりせに首を傾げる。

「ん……なんだろ、今変な感じしたから……」

「変な感じ？」

「うん、シャドウと戦闘が始まる瞬間みたいな感じって言えばいいのかな」

普段からナビゲーション役を担うりせは、草食動物のように危機感を察知する能力に長けている。

他のメンバーはもちろん、完二もりせのこういった直感や感覚は信じている。

「……シャドウがいるってのか？」

戦闘要員ではないりせを庇えるように寄り添い、周囲を警戒するように身構える。

テレビの外でシャドウに遭遇したことはないが、それ以外にもなんらかの危機が迫っている可能性はありえた。

「そうじゃないけど……うーん、びりつとした、みたいなの？」

「シャドウでは、ないんだな」

「うん、たぶん……。こっちではサーチ出来ないし、確定ではないけど……」

おろおろと心配そうに身体を縮こまらせるりせを見て、完二は自分がすっかりしなげればと気合を入れなおした。

むしろ、この状況に陥ったのがこんな風に自分が付き添っている時で良かったとも言えるだろう。りせ一人のときにシャドウやそれに準じる何かの危険が彼女を襲ったとすれば、身を守る術はない。

「こっちではない、と思う。……もしかして、

先輩たちに何かあったのかな？」

「テレビの中か……。大丈夫だとは思うが、ちつと急ぐか」

「うん！」

りせのバッグを奪うようにして取り上げると、完二はりせを置いていかぬようなるべく後ろに気を使いながらジュネスへと走り出した。

* * *

「やっぱり通いなれてるあっちの学校とは……違うね」

テレビの中に突如として出来上がった“八十神高校”に足を踏み入れた雪子は、見慣れた場所と僅かずつ食い違っていて大きな違和感を生み出す歪んだ空間に眉を顰めた。

全体的な雰囲気は酷似しているが、廊下の幅や奥行き、壁の色や教室の配置などが少しずつ違うのは、かえて不気味に感じる。穏やかな静寂も今は空虚感を増長させるのみだ。

「ホント、早く帰りたい……」

「おいおい、まだ入ったばっかだろーが」

陽介は掛けていたヘッドフォンを抑えながら千枝に悪戯小僧のような笑顔を投げかける。にやにやと弱音を吐いた自分を笑われているようで、千枝はむっと頬を膨らませた。

「アンタ、平気ですーみたいいな顔してるけど……もし、本当にここでモロキンが殺されたんだとして、その殺害現場に遭遇したらどうすんだよ！」

「お、お前。意外とエグいこと言うな……」

諸岡が被害者で、悼むべきことであることは理解できるが、改めて殺人などと聞かされれば恐怖が勝る。

陽介はぶり返した寒気をこらえるように自分の腕を摩り身震いした。

総司は溜息を噛み殺す。二人がこの場所を怖がることも理解出来るが、もし急にシャドウなものが襲い掛かってきたら、今の二人では目の前の敵にも集中できないだろうことは明白だ。

問題が起こる前になんとなしなくては。

「センセイ、チエチャンとヨースケ、心臓ばっくばくクマ……恐怖状態！」

ナビゲーションを担うクマは、探査員のコンデイションにも注意を払わなくてはならない。今まで辿って来た順路の記憶も兼用しているクマに無駄な負担を掛けるのは酷というものだ。

「……二人とも、大丈夫だ」

とん、と高さの違う両肩に掌を乗せ、総司は続けた。

「もしここで殺人が行われたとしても、モロキンの遺体に出血は少なかった。どこで殺されたかなんて、俺たちが見て判るわけがない」

血痕も争った形跡もなければ、諸岡が殺害された場所を特定することは出来ない。例えば、今自分たちが立っている場所が殺害現場であるという可能性もありえるのだ。

「……相棒、それ、全然フオローになってないから」

「花村くん、大丈夫だよ。地球上で生物が死んだことが無い地点なんて探すほうが難しいくらいなんだから」

「雪子もフォローになつてないから！」

「怖いこというなよ、天城！」

隠しようも無いほどに色を失った顔で、千枝と陽介が叫ぶ。雪子は良かれと思いつつ告げたので、きよとんとクラスメイトの顔を見返し、小首を傾げた。

総司とクマはその様子を見て、今度は溜息を抑えることが出来なかった。

「ちゃんと探索に集中して欲しいクマ」

「……落ち着け」

二人の声は空しくがらんとした廊下に響いて消えていった。

「……でも、センセイ。ここ、シャドウが全然いないクマ……？」

「ただ遭遇してないだけじゃないのか？」

「うぬ、いつもだつて近くに寄らないと正確な場所は判らないけど……。それだけじゃなく、そ

もそも何かいる気配が全然しないクマ」

「……ダンジョンじゃない、ってことか……？」

これだけ広大な場所が開いていてシャドウがいらないというのも不自然な話のように感じる。

今まで救出してきた仲間たちによつて作られたダンジョンにも新しいシャドウが入り込んでいたりしているのだ。

場所さえあれば侵入しているのが普通だと思つていたので、ここまで何の気配もないというのは、入り口広場付近以外では初めてのことだ。

「……警戒だけは続けて。俺もなるべく気を緩めないようにする」

「OKクマ！」

「コンッ！」

ここぞとばかりに存在をアピールするキツネの頭を撫でる。とにかく、この場所の違和感の原因を突き止めなくてはならない。

今までの事件を引き起こしていた犯人は捕まっただけだが、どこか腑に落ちない点があるのも確かだった。

その後、一通り行ける場所のチェックを行ったが、校内は依然としてがらんとした薄ら寒い雰囲気を保ったまま、何の気配もなく探索が進んでいった。

「ここ……本当何なんだろうな。シャドウもないしトラップも宝箱もないし、中もちーとぐしゃぐしゃで前衛的なデザインだけど、それ以外は普通の建物に見えるぜ」

延々同じような場所を歩き回って、そろそろメンバーの集中力も切れかけてきた。

陽介はヘッドフォンを首に引っかけると眼鏡の弦が当たって赤くなった耳の後ろを指で揉み解す。

「やっぱりダンジョンじゃなかったのかな。でも、シャドウが全くいないっていうのも、かえ

って不気味だよな」

陽介の言葉に頷く。千枝と雪子も歩くだけの探索に辟易しているようだ。クマとキツネは落ち着かないように周りを見回しているが、違和感の正体を突き詰めるような決定的な何かがないので、魚の骨が喉に引っかかったような歯痒さを感じている。

「そろそろ六時か……。一旦広場に戻るう」

リストウオッチに視線を移しながら指揮を取る総司の腕を掴んで、陽介は髪をかき乱した。

「うえ、マジだ……。もうそんな時間かよ。っていうか、完二とりせはどうしたんだあ？」

後から合流するはずの一年生二人からはいまだに音沙汰がない。

「二人とも、まだこっちに入っていないんだよな？」

クマに問い掛ければ、身体ごと頭を振って否定の意を示した。

「うん。入り口広場は猫一匹いないクマよ」

「お前の鼻、鈍ってるからなあ……。本当か？」

「ヨースケ失礼クマよ！ もしくマがカンジ
とりセチャン入ってきたの気付かなくても、リ
セチャンが探し出してこっちに声掛けてくれ
るはずクマ！」

「それ、全然威張れることじゃねーから。……
でも、そっか。じゃあ本当に何してるんだ、あ
いつら」

こちらに入って既に四時間は経っている。

いくらなんでもこの時間まで合流出来ない
とは思っていなかったから、陽介たちの時間間
隔は本来のものよりずれていたようだ。

「しょうがない、今日はここまで、かな」

溜息を吐く陽介の隣りで、釣られるように千
枝も大きく息を吐いた。

「全然闘ってないのに、なんかすっごく疲れた
よ……」

「気疲れ、っていうのかな。緊張しちゃってた
からね」

「もー、あたし今日は雪子の家に泊まるうかな。
温泉入りたい」

「旅館泊まりかよ。里中ずっりー」

「あたしは雪子の部屋に泊まれるもんねー」

「ク」

「クマも」って言ったら……どーんだかんね」

「……く、暗くなる前に帰らないとヨースケマ
マが心配するクマね……」

「それ、苦しいから」

ぎゃあぎゃあと騒がしいいつもの会話を背
中で聞いていた総司は、正面玄関に差し掛かつ
たあたりでぴたりと足を止めた。

「……あれ？」

「ん？ どうした？」

彼にしては珍しく困惑した声を出したのを
聞きつけて、陽介が早足で総司に並ぶ。同じ視
界を共有して、彼が何故困惑したのかを察した。

「……門、閉まっている」

先ほど入ってきた校門は、高い鉄の格子でぴ
つたりと閉ざされていた。

「ええ！」

「な、なんで？」

慌てて千枝と雪子も門に飛びつく。

「し、閉まっちゃってる……下校時刻にはまだ早い……ってそうじゃなく！」

「全然……開きそうもないよね、これ」

雪子がおそろおそろ黒い鉄柵を掴み、押したり引いたりしてみるが、頑丈な校門柵はきしりとも音を立てる事無く、微動だにしなかった。全員で力を込めて押し開こうとしても、結果は変わらない。

「ちよ、これ、閉じ込められちゃった……？」

見上げるほどの門はとも上れそうにないほどの高さがある。

「うー」

千枝が思い立って身体を柵の隙間に捻じ込もうとしたが、もう少しなのに出入れそうにない。

「お、おいおい、やめとけて里中。ハマったらどうする！ お前は自分で思うほど細くない……いでっ！」

「ごちん、と鈍い音のする鉄拳を貰った陽介は

潤んだ瞳で千枝を睨んだ。

「何するんだよ！ 本当のこと……だっ！」

「うっさい！ アンタにあたしの何がわかる！」

「林間学校で水着見て……あ、なんでもないですほんとうにすみませんでした」

一息に謝り倒し直角を超える勢いで頭を下げる陽介の隣りで、雪子が真剣に困った様子で鉄柵を握り締め、呟いた。

「……でも、どうしよう。これじゃあ帰れない……よね」

「うん。参ったな」

沈着冷静なリーダーも、これにはどうする事も出来ない。

頭が通れば身体も通ると何処かの手品雑誌で見かけた気がするのだが、鉄柵の間隔は十五センチ程度のもので、自分達の大きさでは通れそうにない。

「クマを折りたたんで細くしたら通らないだろうか……」

テレビの中なら、クマの中身は空なのだし。
 「せ、瀬多、それはちょっと無理があるんじゃないか……」

まず、半円球の頭が通らないだろう。

ぎゅうぎゅうに圧迫された着ぐるみの胴体部分がふらふらと鉄柵を潜り抜ける情景を想像し、うつと息を詰まらせる陽介の隣りで、クマが一応鉄柵と格闘してみたが、チャックの金具が邪魔をして通り抜けることは出来なかった。

「く……クマはごんぶつとい、ふとつちよなダメダメクマ野郎だクマ……っ！」

「いや、そ、そうでもない、と思うぞ……？」
 ヘタな事を言うどダイエツトに燃え尽きかねない乗せられ易い性質を持つクマの、肩と思わしき部分に手を置いて、陽介はどもりつつもフォローに廻った。正直、頭を外してふにゃふにゃの胴体がふらりと入り口広場に戻る様を想像すると、通らなくて良かったという安堵感の方が強い。

むしろ、今頑張ってくれたクマには悪いが鉄柵に挟まった胴体が、なんとか向こうへ行こうとじたばた足掻く場面だけでお腹がいっぱいである。

「コンッ」

「あ！ キツネさんなら通れるね！」

「おおー！」

すんなりと鉄柵の向こうへたどり着いたキツネは、誇らしげに胸を反らしてひとつ吠えた。きらきらと輝く瞳で総司を見つめる。
 指示を待っているようだ。

「キツネ……。一人で、一匹で入り口広場まで戻れるか？」

「コン！」

賢いキツネは総司の言葉を理解して頷く。

「よし、じゃあ、入り口広場まで戻って、りせと完二が入ってきたらここまで案内してやってくれ……。とりあえず、俺たちはここで待機する」

「でも、もし居なかったらどうする？」

「その時は、ある程度したらまたここに戻ってきてくれ……俺の言ってること、わかるか」

キツネはぐるりとその場で回転した後に、またひとつ明朗に鳴いて見せた。

「うおーキツネ！　今はお前が輝いて見えるぞお……！」

「宜しくね！」

「気をつけて！」

「無茶はしないでクマ！」

門の向こうで、キツネが頷く。

「帰り道で異常があれば、またここに戻ってきてくれ」

メンバー全員から頭を撫でられ、希望を託されたキツネは金色の流星のようにその場を立ち去った。

あとは、キツネが無事に完二とりせと合流出来ることを祈るしかない。

「……とりあえず、どれだけの時間がかかるかわからない。惣菜大学のコロツケとかなら持ってきてるから、軽く食事にしよう」

総司の持ち物から取り出されたコロツケに、千枝が歓声を上げた。

千枝と雪子は校舎の段差に腰掛けて総司が持ってきたコロツケに舌鼓を打っていた。

クマはその対面の地べたに座り込み、なにやらオーバリアクションで二人に話し掛けているようだ。

談笑の様子をつかがいながら、鉄柵に凭れるようにして地面に座った総司の隣りに陽介が座った。

同じようにしてコロツケを齧りながら千枝たちの様子をつかがいつつ、小声で話し掛けてくる。

「……もし、完二たちが来ても門が開けられるかはわかんねーな」

ぼそりと呟かれた言葉に、総司は小さく頷いた。

「それ、女子たちには言うなよ」

「ん、そりやな。……でも、どうにかしないと本気でまずいぞ」

か弱い立場にある女性や子供に無用な混乱や不安は与えたくない。意見の一致を確認して、ひとまず陽介はほっと息を吐く。

特捜隊のリーダーであり、信頼できる相棒であり、名実共に要でもある総司が潰れば、恐らく自分達はいくらも持たないだろう。彼の判断や能力に頼りきっている自分を自覚しつつも、陽介は不安を共有し、状況を打開してくれる相手が欲しかった。

「どうにか、しないとな」

「……ん」

総司に言えばなんとかしてくれる。

そういった考えを持つことに抵抗を感じないわけではないが、陽介はそれらを全て噛み殺して頷いた。

「頼りっぱなしで、わりいな」

自嘲するような苦い笑いに、総司はきよとんと目を丸くする。

厚い前髪と持ち前の鋭い瞳が、そうするとやけに幼く見える。

「俺も、頼りにしてる。相談できる奴がいてよかった」

ふ、と和む表情に打算や嘘は含まれていないように見えた。

「……おう、俺も頼りにしてる！ 頑張ろうぜ、相棒！」

なんだかとても嬉しくなって、陽介はコロツケを一息に食べると拳を突き出した。総司が笑ってその拳に自分の拳をあてる。

ごち、と薄い皮のような肉に包まれた骨がぶつかる鈍い音がして、痛いというよりはくすぐったかった。

どちらともなく、思わず笑いが零れる。

「一昔前のドラマみたいだな」

「ははっ、言えてる。でも、たまにはいいんじゃないね？」

「たまには、な」

「そうそう」

照れ臭くてばしばしとお互いの背中や腕を叩き合いながら笑う二人の様子に、千枝たちは首を傾げつつも微笑ましそうに見守っていた。

* * *

「どうしよう、先輩たち、テレビの中にも居ないなんて……」

ジュネスの屋上にあるフードコートの一隅で、りせは紙のように白い顔を歪めて完二に視線を向けた。ふとした瞬間に強い光を持つアイモンドアイが、今はじわりと潤んでいる。

「バカ、何泣きそうになっただよ！」
「だって」

先ほどまではつんと気丈な振る舞いで、テレビの世界をヒミコというペルソナを駆使して辺りを探っていたというのに、見つけれない、どこにもいない、と零したあとにはべたりと座り込んで動かず、完二は彼女をなだめすかすかしようやくここまで引っ張ってきたのだ。

そろそろ日が落ちる。まだ高校生である自分たちは、夜は家に戻らなければならぬという制約がある。

「……あの人たちは、大丈夫だ」

りせはきつと、直感で総司たちの現状を感じている。そうでなければ、たった数時間消息がわからないだけで、ここまで取り乱さないだろう。

「大丈夫って、わかんないもん、そんなの……」

「大丈夫だっつたら大丈夫なんだよ！」

聞き分けのない子供のように繰り返すりせに、完二は怒鳴るように返した。

「つく、そんなに、怒鳴らなくてもいいじゃない、ばかんじー！」

びっくりしたのか、堰を切ったように泣きじやくるりせに、完二ははつと我に返って、ままたらない自分に溜息をついた。

総司たちならこんなとき、上手く彼女を慰めたりフォローしたり出来るんだろう。

「大丈夫、なんだよ……」

自分に言い聞かせるように、呟く言葉は情けないくらい掠れていて。完二は悔しさと焦燥を抱えて、出来る事といえば不器用にりせの頭を撫でることくらいだった。

「くっそ、連絡くらい入れろよ、先輩ら……」
結局、その日から総司たちはこちらの世界から消息を絶ってしまったのである。